

令和4年度総合教育会議議事録

1. 日 時 令和5年2月21日(火) 10:00~11:30
2. 場 所 大田市民会館中ホール
3. 出席者 大田市長 楫野 弘和
教育長 武田 祐子
教育委員 梶 伸光
教育委員 竹下 ちとせ
教育委員 仲野 義文
教育委員 福間 信隆
教育委員 岩谷 律子

(事務局職員)

政策企画部長	飯田 徹
教育部長	森 博之
教育部総務課長	勝部 浩司
学校教育課長	坂井 務
社会教育課長	大門 克典
山村留学センター長	矢田 孝之
学校給食センター長	後藤 裕之
教育部総務課長補佐	西上 基道

4. 傍聴者 35名

5. 会議内容

テーマ

「学校再編の考え方の見直しについて」

(1) 開会

森教育部長

令和4年度大田市総合教育会議を開催します。

総合教育会議は、平成27年度から市長と教育委員会が十分な意思疎通を図り大田市の教育の課題、或いはあるべき姿を共有し取組の方向性を共有することを目的に開催しております。会議は公開としております。

本日も多くの方々が傍聴にお出掛けいただいております。

本日のテーマでございます。昨年の夏から見直しに着手している「学校再編の考え方の見直しについて」をテーマにしております。

進行を楫野市長にお願いします。

(2) 内容 (進行：楫野市長)

楫野市長 教育委員の皆さんや武田教育長には、現在の学校再編の計画づくりの際、同じように総合教育会議に出席いただいたということで、今回2回目になろうかと思っています。その時と状況が変わって来ましたので、忌憚のないご意見を伺いたいと思います。

今日は何かの結論を生み出すことではありませんので、皆様方が感じておられる大田市の教育をどうするかということについて、それぞれのご意見を賜りたいと思います。それでは学校再編を見直しました経過について、事務局から説明をお願いしたいと思います。

勝部課長 前の方のスクリーンをご覧ください。この度計画を見直すことになりました要因は3つの事柄でございます。

まず、学校施設の劣化についてです。大田市の小学校、中学校は築30年を超える建物が大半でございます。年数が経ったということで、様々な学校で故障件数が増えて来ている状況がございます。雨漏り、外壁の剥離と、建物自体に深刻な影響を及ぼす故障箇所が発生することが予想されました。このことから、昨年7月8月ですが、大田市には建築士の資格を有する職員がおりますので、全ての小中学校の施設を確認に回ってもらったところでございます。その結果4つの項目を挙げております。

まず一番重大な事柄としまして、鳥井小学校、五十猛小学校でございます。塩害によるものと思われる躯体、特に外壁に重大な損傷があることが分かりました。二つ目の大森小学校については、かねがね教育委員会としても当然対策が必要ということで、市内唯一耐震補強がなされていない学校ということで把握をしていた事柄ですが、改めてこちらに載せております。大田小学校、仁摩小学校、第一中学校、第二中学校、大田西中学校の5校につきましては、昭和40年代或いは50年代に建築された建物であり長年の経過によって劣化が進んでいるという状況を改めて確認したところでございます。久手小学校については、現状そのような重大な損傷はございませんが、この時点で対応しないと劣化は進行しつつあると指摘を受けたところでございます。こちらが1つ目の要因である建物の劣化ということでございます。

続きまして出生率の減少ということです。現在の計画を作りました令和元年度の出生数は200人ということで、以前よりは出生数が減少したことは充分把握した上で計画を作ったところでございますが、令和3年度には174人ということで、170人台になったところです。今年度も同程度の出生数が見込まれています。資料に小学校の児童数・中学校の生徒数、今年度と6年後の令和10年度を比較した人数を載せております。小学校は6年間で275人減となり学校におきましては、まず小学校へ影響が出て来るということでございます。こちらが2つ目の要因でございます。

続いて3つ目の要因といたしまして教員不足でございます。これは島根

楫野市長

県だけでなく全国的に課題となっております。大田市の状況は今年度当初、講師不在の学校が4校、非常勤講師で対応した学校が5校ございます。表には10月1日現在としておりますが、全体においても欠員が続いている学校が2校あるという状況で、きちっとした職員配置、充足した職員配置が出来ていないという現状がございます。以上、この度学校再編を見直すに至った3つの要因についてご説明させていただきました。ありがとうございます。先ほど説明がありましたように劣化が進んでいるということで昭和40年代、50年代の建物については、この10年くらいで建て替えが必要になると思っています。このことは分かっていたことです。平成になって建てた建物が、実は相当傷んでいるということが今回の調査の結果として分かっております。実は調査にあたり公共事業の適正化というのを進めているのですが、そのようなことに対して市役所の職員にノウハウがないものですから、私が県職員時代の部下であった建築技師を昨年度から採用いたしまして後進の指導等を含めて取り組んでもらっていますが、その職員に全体を見て頂いた結果が先ほどのグラフになっております。それから出生数の話につきましては、私が市長になる前、その当時は250人前後で推移していたんです。その状況が続くならば大田市は大丈夫だなと思って市長になりましたが、私が市長になった途端200人の状況になってしまいました。その後、地震があり、コロナがありということで結局少子化が止まらないという形になってしまいました。これがコロナの影響なのか、コロナが収まればまた復活するのか、見方が色々あるとは思いますが、全国的な状況からしましても劇的な回復は難しいと思っています。そうしますと単純に35人学級とするならば5クラスから6クラスあれば良い訳ですから小学校、中学校1校ずつで良いレベルになってしまいます。私の年代では同級生が1,000人以上いたと思いますので、そういう状況を考えますと本当に危機的な状況ですし、学校教育におきましてもどういう教育をすれば大田市の子どもたちがきちっと未来に立ち向かえる様な子どもたちになるのか喫緊の課題だと思っています。理論的には1校で済むといっても通学の時間や親の負担を考えれば、この広い大田市でそんな訳には行かないと思っています。適正な学校数というのはおのずから考えて行かなければ、エリア毎に配置していかなければならないと思っておりますので、そのあたりも踏まえましてこれから皆様のご意見を伺いたいと思っております。竹下委員お願いします。

竹下委員

説明をいただいたのですが、説明の内容というのは説明を受けた時点では受け入れ難いような、そういうような気持ちでした。将来的には統計的な数値が示すように推移して行きますし、学校も説明があったような姿を想定しておくことが必要ではないかと今は思っております。行政が、いわゆる適正な規模ということからこのような学校の数を提示された訳ですが、それに対してどんな色付けをして行くかというのはこれからの問題で、住民の皆さんとたくさん協議をして新たなコミュニティを作るよ

うな考えの方向に向かって行かないといけないと思います。小学校が4校～5校、中学校が2校～3校になると大体1学年が30人位の学校規模になるかと思っています。学年が30人になると学校規模として120人～180人ですか。この人数でいうと小規模でなく中規模を目指す形になるのかなと思って見させて貰いました。

大田市の学校再編統合計画について、令和3年の計画と平成20年の計画を比較し経緯を追いながら考えてみました。平成20年の計画は、ブロック単位を意識した計画で、地域のまとまりという点に重点を置いていました。学校の適正配置、つまり小学校は4キロ以内、中学校は8キロ以内、通学時間は1時間以内という点に配慮した計画でした。さらに適正規模については、1学年15人以上、可能であれば25人となっていました。さらに学校数を小学校は22校から10校へ、中学校は8校から3校へ統合するという具体的な目標値も挙がっていました。国が法的には、小・中学校を12学級以上18学級以内と規定している学校規模から見ると、大幅に少ない規模設定でありましたが、小規模・中規模の多い大田市における最善の計画だったと思われます。しかし、この計画が出された当時は学校統合ということで、具体的な学校名を挙げて提示されていることで住民に与えた衝撃は大きかったと思います。当時、私自身も自分の子どもたちの通っていた学校が無くなると言った感想を持った記憶があります。その後、平成20年の計画により再編統合は着実に進められました。地域への丁寧な説明と話し合いが重ねられた結果、小学校は22校から16校へ、中学校は8校から6校へと再編統合が進みましたが、新しい学校が開校となるまでには2年から6年の期間を要しています。その後、平成27年に出された文科省による適正規模・配置の手引きには、法令上、学校規模は12学級以上18学級以下が標準とされていますが、特別な事情がある時はこの限りではないとし、小規模校の存続を選択する市町村の判断も尊重する考えを示していました。そこで大田市においても適正規模ばかりに捉われない魅力ある学校づくりという観点からも議論がなされました。令和3年の計画には、小学校は再編しない、1学年が2人以下3年経過時点で再編統合を検討する、義務教育学校・特認校の選択肢、コミュニティスクールの充実といった小規模校の存続を最大限尊重した計画になったと記憶しています。令和3年の計画にある1学年が2人以下3年経過した時点に達したことにより、この度池田小学校の統合が決まりました。超小規模校という形となつてからの学校維持は児童や先生方はもちろん、支える地域の側にとっても最善は尽くしているとはいえ、大きな負担が掛かっていたのではないかと思います。ちなみに平成20年の計画から9年後の平成29年3月に再編統合の検証としての報告が教育委員会定例会で行われました。それによると、再編統合した3つの小学校と2つの中学校のPTAの方からは、当初不安はあったが統合後の児童生徒は比較的早く学校に馴染み、友達関係も広がり統合して良かったという意見をいただいています。こうした経緯を見ると平成20年の再

編統合計画にも、もう一度目を通して10年以上経過した今の大田市における適正規模などを再検討してみる必要があります。その際には令和3年の計画の中にある小規模学校の対応も織り込んでおく必要があると思います。

楫野市長

ありがとうございました。前回の再編計画では、やはり小学校を何とか地域に残したいという事で計画作りができたと思うのですが、我々も定住対策をやる意味で教育と医療は非常に大事な視点で、地域に小学校の無い所に若い子育て世代が住んで貰えないというのが大きな要因としてあったと思っています。今回こういう形で先ほど説明しました状況に追い込まれたのは学校の施設の劣化というのが非常に大きいということ、それから少子化のスピードがものすごく早まってしまった、この2つが大きな要因だと思っています。バランス型の小規模校になってしまえばという考えは持っていませんので、小規模校の良さを理解しながら一方で全体のバランスはもちろん、行政の長も含めて考えて行きたい非常に重たい課題だと思っています。福間委員お願いします。

福間委員

これまでの経過について竹下委員から細かく説明されたので充分ご理解いただけたのではないかと思います。私はこれからどうしたいか、どうすれば良いのかの視点から話をさせていただきます。先ほど説明がありました内容は、昭和生まれの私にとってはとても寂しい話です。同級生も500人から1,000人近い人数がおり、勤務した学校も松江一中、出雲一中が1,000人規模の学校。最後に勤めさせていただいたのが志学小学校。大規模の良さも小規模の良さも充分わかって勤めさせていただいたので、こうして時代は大きく変わってきていて致し方ないことではあるかなと思っている所です。どうしても通過しなければいけない、見過ごすことの出来ない課題であると痛感している所です。みんなでこうして問題を取り上げて考えることはとても大切な事であると、その立ち位置に今いるという責任を感じながらお話をさせていただきたいと思います。私は寺の住職です。最近非常に墓仕舞いが増えています。その背景とはどうなのかなといったときに、各家庭が核分裂して、先祖代々繋がってきている家というものから離れて行っているというのが見え隠れしていると思っています。それはどうしてかと考えてみると、やはり生活中心で住み良い環境、或いは場所を求めて行くというそういう考え方に変わって来ていると思っています。自分が生まれ育って来た地域に留まらないで、自分の思いの中で生活したい方が非常に増えている。それはやはり、買って移って住み替える、そういう考え方が広まっているのではないかという気がしております。そういった中においては新しい人と古い人の混住地域が段々増えて来ている、大田でもそういったことが言えるのではないかと考えている所です。そういった中で学校再編という所を考えると、今までやってきた学校再編と、先ほど説明のあったように中身をもう一度再検討していく必要があります。今までやってきた再編成はどうしても中身を考える時、人数の確保とか学校運営の効率化の一方向

のような気がします。これも一理あるのですが、ただ単に子どもの数が少なくなったからその子どもたちを、大勢の地域に取り込むという考えは、戦国時代の勢力争いみたいな感じがしてなりません。やはりそのようになると大規模にいる人、小規模にいる人の考えにズレが生じて来るのではないかという気がします。自分の所はある程度規模があるからそういった問題についてはという思いがある人はいるのではないかという気がしてなりません。特に再編成するという事があれば、ここから新しい歴史が始まるという考え方や発想で考えていただきたいという人もいます。大田市をどういう風な形で残して行くか、どの様なことを目指して行くのか、そこに住む人はどういう思いを持って発想力を持ってまちづくりをして行くか、そういう上に立って子どもを育てて行くという、やはりゼロベースにおいて、この再編成を考えていただきたいというのが私の一番の思いです。これが、失敗とか失敗でないとかという問題ではなく、当然皆さんの理解のもとに再編されたと思うのですが、二中の校区が一中の校区を跨いで統合されたという事については、私も統合された時にちょっとおかしいなという思いがあって、再編成とは難しい事だと当時思ったのですけれど、そのあたりを含めて、大田小学校とか長久小学校とか久手小学校というものを取り払って、さっき言いましたようにゼロベース、どこにどういうまちづくりとしてどういう状況の中で環境をおいてという所からスタートであっていただければと思います。

楫野市長

ありがとうございました。私も二中校区ですけれど、私は静間中学校でも40人が1クラス、私の2学年上までは2クラスでした。久手は3クラスくらいあり、当然それなりの規模でした。それを第二中という形で大きな中学校へ再編成した、物凄くドラスティックな統合だったなと思っています。その時様々な議論をされて、保護者の方も真剣に考えられた結果として実施されました。その時代に応じた統合に対する考え方は違ってくるだろうと思っています。現在難しいことは、大田の場合大規模校はできませんので中規模校ですけれども、統合したとしても、馴染めない子どもたちが出てきているので子どもたちにどういふふうに対応したら良いのか、色んな観点で考えて行かなければならないと思います。一方で、地域づくりを考えている私市長としての思いは各地域がそれぞれ持続的な地域づくりをしてほしい、そのためには、次世代がいなければ難しいですが、実際には大田市の中でもどうしても大田町、長久町という所に家を建てている核家族の方が非常に多くなっています。それ以外の地域から転居されるわけです。次の世代をどう地域で暮らしてもらえるか、それぞれの地域で考えて貰わないと、人口減少に歯止めがかからなくなって行くと思っていますので、そういったことも含めて実は学校再編成は地域づくりのターニングポイントになると私も感じて居るところです。岩谷委員お願いします。

岩谷委員

私は令和3年のあり方検討委員会の委員の1人として、たくさんの方と話し合わせていただいたメンバーの1人です。そういう立場として、始ま

ってすぐに見直しをしなければならないということが非常に悲しいなという気持ちの半面、すごい英断をされたのだなということ、あちこちの説明会を聞く度に感じております。そういう委員であったという立場と、小学校で長年子どもたちの教育に携わってきた立場として少しお話をさせていただけたらと思います。1つ目は、私の個人的な考えであるかも知れませんが、せめて小学校低学年までは、歩ける範囲に学校があって、地域の人や家庭に支えられながらしっかりと地域を感じながら育つことが大切だと思っております。それが今出来ないという状況になっているということ、先ほどから説明していただいて、まさにそうだと思います。だとするとこれから先、一番大事にしてほしいのは、やはり子どもたちの心の根っこという物を育てるという事が大事ではないかと思っております。そうやって小学校の低学年まで歩いて通いながら地域に対する愛着ですとか、大好きな近所のおじさんですとか、大好きな場所という物を実際に肌で感じることによって、私自身もそうですけれども子どもたちがふるさとに対する思いですとか、これから先どんな辛いことがあってもたくましく生き抜いて行くような心の強い根っこを深く広く広げて行くものだと思います。それが統合することによって出来にくくなるのであれば、やはり小学校へ入学するまでの幼児教育が大事になってくるのではないかと思います。保育園も幼稚園も統合が進んでいます。だとするとその子どもたちがどうやって地域を感じて行くのか、地域の人と関わっていくのか、地域づくりとも関係がありますけれども、そのあたりをしっかりと掘り下げて行かないと統合されて入って来た子どもたちは、例えば生活科という学習で地域探検をするのですが統合された学校ですと地域探検は統合された学校の場所にある、周りの地域しか歩いて見てまわることができません。そういう子どもたちが、もともと心の中に地域の大好きな情景ですとか大好きな人がいる状態で上がって来ていけばいいですが、そうでなかったら自分の地域はどこにあるのかという思いを持つ子どもも多いのではないかと思います。そうすると心の根っこみたいなものは伸びていないので、これから先何かあった時にふわふわしてしまうのかなと、長年小学校で子どもたちと携わって来た私の思いです。だとすると小学校に上がるまでの段階で、どんな風に子どもたちを育み育てて行くのかという議論もしっかりして行く必要があると思います。それにはやはり、地域でまちづくりセンターを中心として、地域での行事活動や祭りなど様々な体験活動と学校行事を関わらせて行くかということを考えて行く必要があるのではないかと思います。一番大事なのはやはり子どもたちが大きくなった時に、拠り所となる様な子どもの心の根っこみたいなものをしっかり作ってやるのが大事だと思いますので、先ほど福間委員もおっしゃったように、数の議論でこの学校とこの学校を統合するとか、この校舎の方が長持ちするからこっちの校舎にしようという考えでは無く、子どもたちに何が大事かということ考えた上でこれからの再編に必要ではないかと感じています。それから2つ目です。大田市に1校

の小学校、大田市に1校の中学校という大変だと思います。これから先議論が始まって行くと思いますが、どんな規模の学校がどんな所にでき行くのか、そういうような学校を何校作って行くのか、先の見通しをしっかりと持つ必要があります。これまで各学校から積み上げて来たふるさと教育が全くゼロベースになるのでは無く、学校の魅力化も全くゼロベースになるのでは無く、そういう話し合いの中に各学校が積み上げて来た物、各地域で積み上げて来た物が上手く取り入れられて計画がなされて行くといいなと思います。先ほど福間委員がおっしゃったゼロベース、私は賛成ではありますけれどゼロベースで全く今までのものが無しになるのではなくて、いいものや、これまでやって来たけれど涙を吞んで削る物という物をしっかりと話し合えば良いのではないかと思います。先ほど福間委員は新しい物は作って行けば良い、ここからがスタートだとおっしゃったのですが私もその通りだと思います。ここがチャンスなので今まであった物をチャンスと捉え、しっかり見直して各学校でも素晴らしい教育が実践されていますので、より良い物になるように計画的にまとめる必要があるのではないかと思います。最後にもう1点思うのは、繋がるということが欠けているような気がします。自分が学校にいる時は、繋げるという意識を管理職として持っていたのですが、繋げるというところどこか人任せ、どこか上からしているような感じがするのですが、この再編の見直しに当たっては私たち1人1人が、誰かと繋がる意識を持つこと、それと学校と家庭、学校と地域、学校と保護者、教育委員会と学校、教育委員会と地域、市議会と市民など、様々なところがどうやって今やっていることが上手く繋がって子どもたちのためになるのか、私も含めてですが、一人ひとりが1歩踏み出し繋がるという意識を大事にして話し合いが出来れば良いのではないかと感じています。

楫野市長

ありがとうございました。保育園、幼稚園という幼児教育の分野でも統合が始まっていますし、実は幼稚園、保育園の方が越境は多くあります。それはおじいちゃんおばあちゃんのいるところ、つまり実家の近い保育園に行かせる方もいらっしゃるし、職場の近い所へ行かせる方もいらっしゃるし、必ずしも地域の保育園の子が地域の子ばかりでない状態が生じています。一方でこれからは幼児教育と学校教育の両方に繋いで行く取組も非常に大きいことではないかと感じているところです。今も課題のあることについてはそういう取組をしていますけれど、ちゃんとすり合わせが出来るようなことも必要になってくるのではないかなという感じがしています。統合した後のふるさと教育としては、私はよく温泉津の井田へ出かけるのですが、和牛の共進会・メロンの出荷、そういうのをやると温泉津小学校が皆で来るのです。共進会の時は、子どもたちがどの牛が良いか判定して表彰するというのを井田地区はやっておられます。井田から小学校は無くなりましたが井田地区のことを知る機会をきちんと温泉津小学校は担保しておられる、そういうことを統合した後も工夫しながらやっていく努力が必要ではないか、それを地域が受け止める、その繋

がりが大事なことだと思っています。

仲野委員お願いします。

仲野委員

今回の再編計画の見直しはすごく勇気の要ることだだと思います。行政が作った計画というのは途中で「おや？」と思うことがあっても最後まで通されるというのはよくあることですが、その中でいろんな状況が出て来てそれを見直すというのは凄く勇気の要ることだと思っています。そういう意味では教育委員会の皆さん事務方の皆さんも大変な思いをされて今回の議題を出されたのではないかなと思っています。先ほど市長が言われました数の問題です。小学校4～5校、中学校2～3校、さらっと言われましたが、これも大きなことだだと思います。これまで大田市全体としての数は、どのくらいが適正なのかという議論はほとんどなされていなかった、そういう意味では具体的な市全体の数が出て来たことも今回すごく重要なことではないかなと思います。その上で考えないといけないのは福間委員の言われたように私もゼロベースで考えることが重要だと思っており、それはどういうことかという、該当する地域の人は、再編の問題は自分のこととして考えられますが、該当しない地域の人にとっては、よそのことになってしまいます。今回議論しないといけないのは、大田市の教育、学校をどうして行かないといけないかということなので市民の皆さん一人一人が自分のこととしてきちんと考えることがまず重要だろうと思っています。すでにある学校をどこどこをくっつけて、どの校舎を利用するかという議論は今回すべきではないなと思います。そういう意味でゼロベースでということです。新しい学校をどこに作っていくのかという設置の場所の観点ですが、それもいくつかの重要な問題だと思います。その上でいくつかの視点をきちんと持っておかないといけないと思います。一つは学校を設置する場所の教育環境の問題です。そこにどういった教育資源があるのか、それは人とかモノとかを含めて学校設置する場所にどれだけ教育の環境や資源が整っているかということがまず重要だと思っています。これは地域を見直して、出来れば数値化しながら評価して行くということが必要だと思っています。もう一つは地域の教育力だと思っています。地域自体が教育にどのくらいの情熱を持っているなどが重要な視点となってきます。少し乱暴な言い方ですが、ゼロベースと考えた時に、今既に学校が無いところもあるのでそこは新しいチャンスかもしれない。ある意味学校を自分たちの所へ誘致するというのも今後考えて行くようなこともあっても良いのではないのでしょうか。その上で学校を自分たちの地域で作るのなら学校とどう関わっていくのか、地域の資源をどういうふうに学校で活かしていくのかということや地域の皆さんがプレゼンして行くということをやった方が良いのではないのでしょうか。そのことが結果として自分たちの地域を今後どういうふうにしていくのか、これはまちづくりの観点がそこで出てくると思います。学校再編の問題ではなく、市長もおっしゃられたようにただ学校を残す、残さないという話でなくて自分たちが居る地域をどうして行くのかという

ことを地域の人達がきちんと考える重要なきっかけだと思うのです。そういう認識の下で考えていただきたいと思います。やはり地域の皆さんが自分のこととして考えて行くような議論をこれからは教育委員会の問題でなく、市役所全体で全庁挙げて考えていただくような再編の形になって行くのが一番必要かと思います。

楫野市長

ありがとうございます。実は学校統廃合といった時に、例えば大田小学校を残して長久小学校を合併しようとした時、大田小学校にするのか、大田小学校と長久小学校を合併して新しい学校を作るのかでは発想が全然違います。新聞で見えておられると思いますが、鳥取の倉吉でまず2校統合して新しい校名を考えようとした時大きな議論になり、次にそこへもう1校統合して、また新しい校名を考えないといけないという話が生じておりました。最終的に3校が統合されて新しい学校を作ることなので、必ずしも「残る学校」と「統合される学校」という考え方は無いと私も思っています。適正な配置バランス感覚と同時に、学校が持っていた文化をどう繋げるかそういうことも含めて、あえてゼロベースとはそういうことだろうと思います。第二中が開校した時は新しく文化を作ったんだろうと思うんです。そういう感覚もこれからは必要ではないかという感じがしていますし、例えば校庭に新しい校舎を建ててそこをグラウンドにするという形か、仮設校舎を造って今ある校舎を取り壊してその場所に新しい校舎を建てるとか、これからは全然違う所へ造るとか、学校によっては考えざるを得ないと思っています。そういうことも含めて様々なデータを地域の方々にオープンにしながら、しっかり市民の方にも関心を持っていただいて考えて行かないといけないと思いますし、今回なぜ直ぐ変えたのかということ。私は計画というのは、作って終わりでは無く毎年検証しながらやっていく必要があるのではないのでしょうか。私は朝令暮改でも良いという人間なので良いのですが。実は学校というのは竹下委員も言われました様に造ろうと思って直ぐ出来るものではなく、建物というものは基本設計をして実設計をして建設を決めてから少なくとも4、5年掛かります。決めるまでに今回も慎重にやっけて行かなければならず、時間が掛かります。令和8年は直ぐ来ます。今からきちんとやっけて行かないと、令和9年度以降の計画が作れない、そういう意味で今やらないといけないということで動き出しているということは、皆さんにご理解いただきたいと思います。

梶委員どうぞ。

梶 委員

今、皆さんが見直しについての思いや基本的な大事にしたいことをお話になりましたが、前回の再編について市長が先ほどおっしゃいましたように4年前に話しをしました。今日のテーマは、学校再編の見直しということですが、前回の議論では学校のあり方という大きな括りの中で大田の子どもたちを市民総ぐるみでどういうふう育てて行ったら良いのかということについて議論をして、その中での学校再編成ということだったと思います。今回学校再編の見直しについて考える前に、理念をしつ

かりと抑えておいた方が良いと思います。前回の理念ですが、豊かな自然、歴史、伝統、文化など大田ならではの強みである、人、物、事を活かしながら児童生徒の個性・適正に応じた多様な学びを追求できる体制や望ましい教育や環境を整えて行く、こういったことが理念であり、それに基づいて以下具体が述べられ、その中に学校再編の考え方があったと思います。具体的には教育ビジョンや教育の魅力化を通して、それを大きな柱として取り組んで来た訳です。まず、そのことをしっかり抑えて私達は話をして行かないといけないと思います。今回の話の状況を見ますと、小学校が15校のうち、劣化が進行して早急な対応が必要な学校が6校ありました。その中でも特に小学校では3校が急ぐということ、そして中学校は6校中劣化が進行している学校は3校ございました。10年後は、どうなるかというと築40年～50年の施設が15校中13校になります。中学校は6校中4校、かなりの学校が築50年に近づいて来ると建て替えなど大規模改修の可能性が出て来ると思います。その間で予想されることですが、今後10年間に建て替えをしたり大規模改修をしたり、またその間に安全確保の為に小さな改修をしながら子どもたちの命を守って行かなければいけないということが起こって来ます。やはりケースごとの費用をシミュレーションして、どういった形の再編が良いのかを考えていくこともあると思います。更に施設の状況に合わせて児童生徒数の減少という問題も絡んで来ます。児童生徒数につきましては、先ほどもデータが出ておりましたが、今、小学校15校中全校で50人未満の学校が令和4年度に5校あります。これが令和10年度になりますと9校に増えます。中学校は6校中30人未満の学校が3校ありますが10年後は変わらず3校です。10年先の令和15年度には、更なる減少が予想されます。そういったことを全部合わせながら10年先、更に先を見越して大田市民の知恵を全部集結して、今から考えて行かないと大変なことになると思います。根底には、先ほど申しましたように子どもたちが楽しく安全に学べる学校づくりということがあるでしょう。ひいては、明るい未来づくりに繋がって行くのではないかと思います。

楫野市長

ありがとうございました。梶委員がおっしゃる通り、大原則はどういう子どもに育てて行くかというのは、私の時とあまり変わっていないなと思っています。今回、変えないといけないのは、そのために必要な学校の配置はどうあるべきかというのが今回の課題だと思います。そして梶委員にご指摘いただいた様に、結局今後10年、20年後になった時を考えて行かないといけないと思っています。平成の初めのように毎年、次々と学校を建てて行くような財政的な余裕はありません。計画的に、どこを先に作ってそこに投資して行くかということ。小学校、中学校もですが、いずれにしても全ての建物の校舎を建て替える時期は来るので20年スパンで考えて行かないといけません。令和10年に向けて新庁舎というのが大きな財政負担となって居りますし、それと期を同じくして大田幼稚園と大田保育園を統合して認定こども園にしていきます。それに遅れて1

0年後には、市民会館をどうするかという問題も生じますので、10年後に向けて市民会館をどうするかという議論も始めて行かなければいけません。それにプラス学校の校舎をどうするかという話になりますので、一度に建てるのは不可能です。20年くらいのスパンでやって行かないと難しいだろうと思っています。まず最終形は考えないといけません。最終的にはこういう形、例えば170人を前提としてやった場合に最終的にこういう形に再配置したい。一方そこまでの過程で使えなくなる学校は、使える学校にとりあえず一時的に集約という事も、その20年スパンの中に考えて行かないといけないというふうに私は思っています。これはこれからシミュレーションをかけながら考えないといけないと思いますが、一方、子どもたちの安全確保をしないといけませんので、鳥井小学校や五十猛小学校については最低限の修理を行っていかないといけないと思っています。そういう段階を追ったことを考えて行かなければいけません。そのあたりも含めて夏頃に教育委員会の中でシミュレーションしながら叩き台を打ち出して、市民と一緒に議論をして行きたいというふうに思っております。それでは武田教育長お願いします。

武田教育長

私が初めて教員になりましたのは大田小で、その時1000人を超えておりました。その後、大田市で数校の学校を中心に勤務したのですが、池田中学校そして温泉津の4校の統合に関わりました。それぞれの学校で大田市の皆さんの非常な協力を得て学校を運営させていただいてきたと思っております。しかしながら教育長という立場を拝命しましてから、その見方と言いますか、考え方が少し変わって参りました。1つは、まちづくりという視点や財政という考え、そして市の持つ様々な課題についても頭の中に入れながら教育を考えないといけないという思いです。魅力ある大田市教育を作って行くのは勿論ですけれども、教育というキーワードでこの大田市を持続的な街に行きたい、関係人口を増やして行こうと思いが非常に強くなりました。この関係人口というのは、大田市で学びたいという子どもやその家族、そしてこの大田市の学校で自分の授業力・教師力を上げて行きたい、そういう魅力的な教育に関わってみたいという教師であります。そういうことを考える様になって現段階で考えていることをお話しします。先ほど市長から提案がありましたように、私も財政や市の課題のことを考えますと、現実的に市内の学校は数校に絞って行かなければならないのではないかと思います。例えば100万円あっても22校あれば各校に5万円しか配れないのです。それでは5万円で何をするか、未来に生きる子どもたちの豊かな教育の内容が5万円で作れるかということです。でもそれを例えば4・5校にして各校20万円貰えれば、誰かを呼んで体験させて新しい未来に出会わせることができるのではないかと考える訳です。大田が持っている歴史とか、先ほどお話のあった宝と共に未来指向していく大田市の教育を作って行かなければいけないという気持ちを非常に強く持ちました。従いまして先ほどお話のありましたように、これまでにその理念は何年もかけて作っておら

れます。確かにそれは普遍的な価値であります。でも当初作った平成20年からも15年経っています。この先、社会のスピード感はもともと速くなるのに、その時の理念をずっと引きずって、更に先ほど市長がおっしゃいましたように数年かけてそれを実現して行くのか、やはり立ち止まって、この先子どもに10年20年後どういう力が必要なのかと考えないといけません。そのためにはこれまでの慣習や前例に捉われない特徴的な学校を大田市に数校作って、しかもそこに多様な選択肢を持たせていかなければいけないのではないかと、それくらい子どもも多様化していると思っているわけです。ここにはもちろん山村留学センターも含まれています。大田市の実態と喫緊の教育課題を考えた時、私は準備しなければいけない学校が数校あるなと思っています。1つは不登校。今の学校になじめない子が喜んで行く学びの場所を作らないといけないと思っています。全国の不登校の子供の割合は平均2%ですが、大田市は4%です。もう1つは先ほどから規模の話が出ていますが、極小規模をまとめたり、反対に大きい学校には色んな生徒指導の問題があったり、反対に小さな学校で教師を何年もしたあと大きい学校へ行って、今度はそれが自分の力が発揮出来なくて苦しんでいる教員も大田市にはいます。そうするとその規模はもう少し緩やかにしても良いのではと思うわけです。学び方は様々あるので、今の学校の学び方も大切な部分があると思いますが、やはりそれを体験で、或いは実学的に学ばせて行くような学校が欲しい。更には、今までの提案にもあるように義務教育学校とか小中一貫校型の小中学校、また、市街地の少し規模の大きい学校ならではの社会性とかコミュニケーション力を学ばせるような学校も必要ではないかというふうに思うわけです。その時、先ほど出ました地域の力という物が非常に重要に思います。従って地域や個人、その人達が経営する様な私立の学校があっても良いのではないかと私は思っている訳です。温泉津の統合の時、4校の校長が集まって何回も話し合いましたけども、それぞれの4つの地域の特色ある教育をみんなで持ち寄って、これは出来る、これは残したい、これは学ばせて力を付けさせたい、これは伝承させたいというものは残しました。同じ様なものは一緒にしたり、それはもうできているとして整備しました。つまり、少し大きな地域の枠で今も言った特徴的な学校を考えて校区を緩めてみる、そうすると今まで1つの地域だったのが、2~3地域で子どもを育てるというシステムが生まれます。考えて見て下さい。もう10数年経って地域力も落ちて行って高齢化しています。ですから手を繋ぐ仲間を地域も増やさないといけない。それがさっき市長も言われましたように地域の力でという、それだと私は思っています。教育の面です。複数の地域が手を繋ぎいくつかの魅力を分担して担うような、そんな地域のあり方をみんなで話し合って作って行けたらなと思っています。そうすると必然的に校区も緩みます。従って自分の選ぶ学校の枠が広がってきます。更に不登校について言えば、特例校というものがあります。今、全国で進められています。島根県では、まだありませんが、大田

市がすぐ手を挙げれば努力できることだとも思っています。従って今年ゴッドハンズという新しい取り組みを行いました。これはネット上に学校を作って、そしてものづくりをリアルに学んでみたいという子どもを全国から呼んでみようという取組でした。これに市内外、県内外から10数人集まりました。こういう形を皆さんに示しながら山村留学センターのあり方もやはり振り返る時期になって来ているのではないかと思います。一年間コロナで分断されて保護者も来れないような中で、北三瓶小中が地域の皆さんと一生懸命育ててくれていますが、共に新しいやり方を探りながらどういうあり方が社会のスピード感に乗って行って未来志向の大田市を作れるかということを考えていただきたいと思います。もう一つ家庭の問題があります。今のように、特色的な学校を作ればまた選んでも良いということになれば、もう1度我が子をしっかり見て自分の子どもはどういう学び方をした方がこの子に合っているのだろうか、そして行政や人任せじゃなく、我が子をどう育てて行けばその子は自己実現するのだろうか、という自分の子育てを1回振り返るチャンスになるのではないかと考えております。

楫野市長

ありがとうございました。私が2年前に武田教育長を指名したのです。任期は3年でございます。最初からトップスピードで駆けぬかれています。どんどん新しいことにチャレンジしていただいて教員も大変だろうなと思っていますが、まだ行っていないことも沢山あります。どうしたら大田の子どもたちに未来に向かって生き抜ける力を付けられるのかということを中心におきながらやっておられることは私も非常にうれしく思っている所です。一方で、汗をかくほどやはり環境をどうするかというのは、どうしても行きつくところです。学校教育もそうですし地域での教育、地域力が落ちている中で地域とどう繋がって行くのか、地域づくりの基本はやはり学校教育なのでここに本当は密接な繋がりが有る訳ですので、こここのところをどう工夫して行くのかというところです。私が市民と語る会で各地へ行った時学校の問題が出て来た時に必ず言っているのは、島根県は海士町で島留学という形で全国から来てもらう学校として存続をした訳ですが、現在孫留学という言い方もあります。自分の子は出て行ったけれど自分の孫を自分の所へ来させて、そこから学校に通わせて自分の母校を守る、そういうこともやろうと思えばできるんですよ。もちろん保護者の理解、協力が無いとできませんが、家があるのでできます。そのくらいの覚悟を決めて生徒を確保して行かないと正直言って学校存続は無理なんです。冷たい言い方ですけど2、3人の学校では無理です。これまで大田市の小規模校で生じていることですが、小学校から中学校まで男の子ばかりのクラスで、高校へ行ったら女子生徒とどうやって話をしたら良いのか分からないという子もいるのです。それからほとんどの学校で兄弟、従弟しかいないということになっている所もあるんです。そういう所で社会性が身に付くかと思うわけです。一方で小規模校ならではのアットホームな環境で伸び伸びと育てている子どもたちを見ると、

これはこれで良いと思います。そこの所のバランスを我々がどう考えて行くのか、そういう時に武田教育長は多様な学校を大田市の中でどう揃えて行くか、そのことによってここで合わない子はこっちにも行けるよというチャンスをきちっと与えて、保護者がその自分の子に合ったところを選べる。もちろん距離感がありますから、かなり遠いところまで時間も掛けてそこの学校へ行くのは中々難しいことだと思いますが、それはどういうふうにシステムの的に整えてあげるかというのが大きな課題、チャレンジだと思っています。ゼロベースでという話がありましたように、やはり今の時代に合ったような学校教育は何かと、それから地域の関わりとは何かということ、大田は地域力、地域との繋がりが大きい。そういう地域の力がまだ残っていると信じていますので、しっかり市の中で議論し一定の方向付けをしたいと思っています。叩き台は8月に出しますが、そのまま行くつもりもありません。しっかり議論して慎重にと言いますか、しっかり議論したいと思っています。是非、市民の方には、そういうふうにご理解いただきたいと思っています。

竹下委員

先ほど、教育長が多様な教育のあり方ということをお話しされました。私も本当にそうだなと思って聞かせてもらいました。極端な例ですが、アメリカの教育制度について記事がありました。アメリカは公立学校離れが進み、学校の多様化が進んでいるそうです。なぜ公立高校へ行かないかという、現代のニーズにあっていない学校になっている、画一的な学校になっているために保護者が選んでいかないそうです。そのような子はどこへ行くかという、チャータースクールというところへ転校して行くようです。これは半官半民の学校で、一応公立の中に含まれている学校ではありますが、カリキュラム的には緩やかな学校らしいです。アメリカでのニーズは、子どもたちは自分の力で自分の仕事をどうしたらいいかという、自分で考えて掴み取って行く力、そういった力を付けてほしいけれども今の学校にはそれが無いということでした。他にも選択肢としては、ホームスクールと言って学校に通わないで勉強する方法や、オンラインラーニング、公立学校にも所属しながらハイブリッド的に組み合わせるようなやり方であるなど、様々なパターンがあります。例えば日本でも、熊本市では不登校のためのオンライン学習支援としてフレンドリーオンラインというのを立ち上げていて、仮想空間上の学校にアバターを作って通うという試みをしているところの記事もありました。そういうのを見ると結局、今の学校に行けない子どもたちというのは、そういう所で全部救われて行くのではないのでしょうか。学校施設にこだわらない学校のあり方、そういったことも確かにあるのではないかなと思います。

楫野市長

ありがとうございます。すでに高校では、N高校という形でネットにおける高校もできていますし、言われましたように、今、学校ではGIGAスクールでネット環境が整っていますので、学校と家庭を繋ぐことが簡単に出来ます。ネットでの配信で教育することは可能です。そういう意味では本当に不登校の子ども達が学校で学ぶのと同じ環境で出来るだろうと

思っています。そういう環境を我々が真剣に考えて行かないといけないのではないかと思います。他にございませんか。

梶 委員

地域説明会は、11月からだった訳で私も全部ではないですが参加させていただきました。その中で地域の皆さんがおっしゃった意見を並べて集約してみましたが、今から再編に不安だという意見と、再編に肯定的だという意見を4点ずつ述べてみたいと思います。私が独断で編集したのではなく、見てこういう傾向だなと公平に選んだつもりです。再編に不安だという意見の方は、まず1点目に「学力を上げる策はあるのか」ということです。次に2点目は「小規模校の方がたくさん言えて討論も出来た」ということです。これは複式学級のことではないかと思います。複式学級の場合は、2学年が一緒に勉強していますが、担任が渡りと言って、例えば5年生のところへ行った時6年生は自分達で司会をして勉強して行かないといけません。そういった意味で小規模校の方の子どもたちが勉強する力が付いたということです。3点目は「統合は悪い事ではないという保証とか説明が欲しい」と言われました。つまり前が見えない訳です。4点目は「地域として学校が無くなるのは寂しい」ということです。この4点が大きくあったと思います。それから、再編に肯定的な意見としては、1点目に「施設の老朽化」です。やはり安全のためと人数が減少していることで、やむを得ないのではないかと思います。2点目に「子どもたちのために再編はあるべきで、人数がある程度いた方が子どもの色々な面から力になるのではないか」という意見です。3点目は「学校施設の劣化や人数減の対策は市行政の全体構想としてあるから」、4点目は「子ども第一ですが総合的、多面的に10年先、その先を見て何回も議論して時間をかけて練ってほしい」とこういったことです。両方とも、4点ずつ上げました。やはり小規模校と適正規模の学校、両方に良さがありますが、そのことをしっかり理解した上で議論していかなければいけないと感じました。例えば先ほど複式学級で渡りの時、子どもたちは力が付くと申しましたが、もう1つ別の観点から言うと、教員は2倍授業のための準備をしなければいけないのです。教員は授業が終わった後も子どもと運動したりしていますので、子どもたちが帰ってから準備をしますが、逆の目から見ると教員の大変な部分もあります。そういったことを考えながらどちらが良いのかではなく、その両方を活かせるような教育を私達は考えて行かないといけないと思います。それから先ほどもありましたが、保護者・地域の住民の理解や同意がしっかりと得られるのか、そういった話をして行かないといけません。これから検討委員会や地域説明会で議論なされて行くと思いますが、再編が必要という方向付けになった場合、やはり小規模校の良さを活かせる学校づくり、適正規模になった時、小規模校が持っていた1人1人を大事にする教育や活躍の場があったり、細やかな指導が出来たり、そういったことができるような学校にして行かなければいけないと思います。それから地域の人や地域環境の中で学べる学校づくりです。先ほども温泉津町井田の例も出ていました。邑智郡でも

統合した学校も知っていますが、やはり地域が大きすぎると風土も変わって来たりして、自分達の地域だという意識が薄れていきます。その所が子どもたちにきちっとわかるようなあまり大き過ぎない、そういった環境で学べる学校づくりが必要だと思います。それから地域から学校が無くなるのは寂しいという意見がありましたが、学校が集中する地域、例えば小学校も中学校もある地域や、或いは全然学校がない地域とかそういったことが偏らないような編成は大変難しいことかもしれませんが、考えて行くことが大事かと思えます。それから最後に将来、再度の建替えが何10年後に起こって来ます。やはりその時に同じ時期に改修が重ならいような計画、そういった事も大事な事かと思えます。

楫野市長

ありがとうございます。最後の課題が、一番財政的に悩ましいところで、例えば10年に一つずつやるとバランスがいいかもいいかもしれないですが、そこまで待てないというのが今の状態なのです。そのあたりが難しい。それをどういうふうな形にしようかなと悩ましいところです。そこで地域の受け止め方は様々あるだろうと思えます。私も静間小学校が無くなるとなると、自分の母校や校歌がその地域から消えるというので本当に辛い物があります。それは今、静間中学校の校歌というのは歌われることはないんです。もう第二中になりましたので。同窓会で歌を思い出して歌うと、どうだったかなと思い出しながら歌うことになります。ある意味地域の文化がそこで失われてしまうということに繋がりがねない。非常にこの統廃合という問題は非常に大きな事だと私も承知しています。けどもただ待たないでやらなければならないことでもあります。教育長、例の学力の小規模校がどうかとか大規模校がどうかにかに見解はありますか。

武田教育長

学力に付きましては、今日たくさんの校長先生方も傍聴に来ていただいておりますが、今大田市を上げて学力を育成するプロジェクトに取り組んでおります。と言いますのも、県平均、全国平均から大田市は学年も教科も非常に下回っているという状況が、ここ数年続いております。もうこれは何よりも学校の果たすべき使命の一つでありますので、学力をつけて行くということを喫緊の課題として取り組んでおります。先ほど、規模の話と絡めて学力の件がありましたけれども、私自身がやはり小さな学校の授業を見させていただくと、例えば中学生が2、3人しかいないクラスで自分の意見を他の生徒にもきちんと伝えようとする授業でも、あとの2人に対して自分の意見を一生懸命に伝えているのですが、それは日頃よく知った仲間であって、そこでどれだけ大田市の未来を担う子どもの学力が付けて行けるのかということも思う訳です。また英語で人に話しかけてみようという授業も、やはり先生と一緒に小さな声で話しても聞こえるような英語の会話のやり取りで果たして力はつくのかどうなのかなということも疑問に思うところです。しかし、一方でその子のつまずきなども時間を充分取って細やかにチェックでき、もしかしたらその子の背景も含めて家族の背景とか学びの状況とか、そういう物を含めて手だ

てができていますよという、そういう工夫を充分やっただけという良さもあるとは思いますが、しかしながら市全体を考えた時には、これからはもっとコミュニケーション力を付けたり、子どもが最初に出会う社会が学校であることを考えれば、ある程度世の中に近い集団の中でしっかり基礎的な学力もですが、それを生かして使っていく力とか、何か様々な集団の中で起こる人間関係のストレス、或いは学習に対する困難差から来る重圧に耐えて行く力とか、そういうことの方がこれから生きて働いていく力により繋がって行くのではないかと、そのためにはある程度の基礎、規模が必要ではないかと思っています。学力育成プロジェクトの中では一つは教員の授業力アップについて県立大学の先生に教えを受けております。1年間で50回以上大田市に足を運んでいただき、約延べ1,000人の先生方が今年ご指導を受けました。また様々な教育施設が大田市にはありますので様々な所へ出かけて行くだけではなく、一中で行いましたように松江高専の先生方とか、それぞれの大学の先生とか、企業とか、そういう方も入っていただいて体験的な学びも進めております。最後には、10年20年先を見通した子どもたちがどんな未来、社会になっているかをイメージして今どんな力を付けて行かないといけないかを探るふるさと夢未来講演会とあって、時代の最先端に行く人の話を小中高と一緒に聞くという取組も始めました。一つ学校の中の教員と子どもの関わりだけで学力を見ないようにしなければいけないと自戒の念を持っている所です。

楫野市長 ありがとうございます。森部長、今の大田市の小中学校の教員の中で大田市出身の教員の割合はどのくらいですか。

森教育部長 半分はおられません。

楫野市長 先ほど、教員不足の話もありました。全国的なことですが実は教員不足の中で、ふるさと教育を一生懸命やろうと思っても大田市出身の教員の数が確保出来ていないです。私がよく言っていますが、ふるさと教育じゃなくてふるさとを愛する教育でなければいけないというのが私の持論なんですけど、ふるさとを愛している教員が教えると更にふるさとへの愛情が深まるのではないかと考えています。ですが出雲や浜田の教員が来て知識としてのふるさと教育は教えられますが、愛までは伝えきれないのだな、という私なりの思いです。本当は大田市出身の教員の数を少しでも増やして行く努力をして行かないといけないと思っています。だいたい温泉津は教員の人を多く輩出している地域だと思いますが、最近、温泉津からの新人さんがあまり無いような気がしており、もっともっと大田市出身で教員になりたいと、子どもたちと関わってやりたいと思えるような学校教育ならどうするのか、そういう難しい大きな課題もあるということをご理解いただきたいと思います。

岩谷委員 先ほど、教育長が大田市で学びたい子どもを増やしたい、大田市で力をつけたい教員を増やしたい。そのために多様な学校、特色のある学校を作りたい。子育てを振り返るチャンスだともおっしゃいました。私はも

ともと学校にいた立場の人間として、学校もチャンスだという事を最後に言いたいなと思いました。たった今、校長先生方が来ておられますので御自身の学校を、私自身もしまだ校長だったとしたら自分自身の学校の特色とは何だろうかとアピールするチャンスだと思います。学力を上げた部分、学力を育成するために自分の学校では、こんな特色のある活動をしているんだと声高らかにしゃべるチャンスではないかと思っています。自分の学校ではふるさとを愛する教育、こんなに地域の助けを受けてこんな努力をしているんだということを声高らかに言われるチャンスではないでしょうか。校長先生方が変わられて今こうやって見ても知っている校長先生が少なく、たった1年半でそれくらい、管理職でも変わるから地域を愛していない教員が、ふるさと教育が出来るのかと今、市長さんがおっしゃいましたが、私はそこは違うと思います。せっかく大田市に来られたのですから大田市を愛してほしいと思います。しっかり大田市を出歩いて、校長先生も自ら地域を歩かれて、新しく来られた先生も時間はないかもしれませんが、しっかり地域を歩かれて地域の方と出会って大田市を愛していただきたいと思います。そんな先生方を創るチャンスではないかなと思いますので、是非今日を機会に私ももう一度大田市の良さは何かと考えたいし、自分自身が居た学校、長久小学校の特色って何かということ教員も校長先生も考えるチャンスを貰ったのではないかと改めて感じました。

楫野市長

ありがとうございました。私も大田市を愛して貰える様に努力したいと思います。ご指摘ありがとうございました。いずれにしても、これからの大田市の子どもたちにとって教育環境がどうあるのかをお示した上で将来的な学校配置を考えたいと思っています。教育委員会だけで考える話でもございません。市を挙げて進めたいと思っております。今後、見直し案を市民の方にお示しをし、意見を公開しながら進めてまいりたいと思っております。少々時間が掛かっても良いと思っていますのでよろしくお願ひします。それでは本日の総合教育会議は、これで終わりたいと思います。

森教育部長

ありがとうございます。皆さん中身が濃く、また、様々な角度からご意見を頂戴致しました。ありがとうございました。本日いただきましたご意見に付きましては、事務局の方で整理を致しまして、皆様へこういうところは伝えて、ここの所はもう少し議論しましょうという展開をして行きたいと思います。これを踏まえて学校再編の考え方の見直しに付きましては、今年の夏8月頃には案をまたお示しして行きたい。そこからまた議論の活発化をさせて行きたいと思っております。それでは以上をもちまして大田市総合教育会議を終了致します。ありがとうございました。

議事録確認書

会議名：令和4年度第1回 大田市総合教育会議

日時：令和5年2月21日（火）午前10:00～

場所：大田市民会館中ホール

大田市長 楫野 弘和 様

大田市教育委員会が調整した上記会議に係る議事録に記載された議事内容について確認しました。

令和5年6月1日

大田市教育委員

梶 伸光

大田市教育委員

竹下 ちとせ

大田市教育委員

仲野 義文

大田市教育委員

鶴岡 悠陵

大田市教育委員

岩谷 律子